



## 村石京子

図書紹介に何がよいかしらと頭をなやませながら、結局、最近手にした本を三冊程あげさせていただくことになりました。

### その一、親は子に何を教えるべきか

外山滋比古（P H P 研究所刊）

この本は、五四年四月に刊行されたもので、「これから「家庭教育法」という副題がついております。四月に入って間もない日、手元に送っていただきました。

外山先生は御存知の方も多いと思いますが、お茶の水女子大の教授で英文学が専攻でいらっしゃいます。そしてその豊かな人間味と広い識見とをもって、言語の問題などを中心として幅広く教育界で活躍しておられます。時折講演などをうかがうと、思いきった発想による齟切れのよい話

し方や、ウィットに富んだ表現に、時の経つのも忘れるとはこのことでしょうか、いつも楽しくひきこまれていくのでした。そして勿論、面白いという魅力だけでなく、心の中に、いつもはありきたりで平凡に見えていたものが何か活き活きと新鮮に見えてくる手がかりみたいなものを教えられるのです。今まで何ということなく話していたおとぎ話や言葉づかひも、先生に分析されると新しい印象で生まれかわるのです。それなら他のことにしても、もっと別の角度で物を見たり考えたりすれば、もっと違った意味合いや発見も出来るのではないかなといった考え方の基になる意欲みいたいなものを与えられる感じが残るのでした。

この本も外山先生の声がそのまま文章になったように、切れのよい言いまわしで現在の学校教育や家庭でのしつけなどに鋭いメスを入れています。最近、教育界などで

も他から批判をおそれるのか、何か自分のしていることに自信がないのか、やんわりと角のない円滑な言いまわしや、独自性のない表現が多くなっています。教育の世界にも戦後民主主義は徹底し、全体的に見て全ての面で向上しているというのに、何か今の教育に欠けているところがあって、それでは素晴らしい人間を生み出すことは出来ないといった歯がゆさがどこかにあるのです。それをいつもいらいらと外側からばかり手さぐりで感じているのですが、その核を小気味よく、遠慮なくついであります。大人は教師でも親でも他の人と同じことをしていることで安心したり、同じ流れに乗ることで正しいと思ったりするのでしょうか。教師は親や他の教師の非難をおそれる自己防衛の本能のようなものが浸透し、親は家庭でのしつけをなおざりにして家庭で行なわなければならない部分まで学校に依存し、学校は社会の求めに応じるあまり教育の何かを忘れてまで、役に立つ人間育成という教育実利主義の思想に走るといった傾向があります。新しいことにしても、たまたま誰かが考えてそれが良いとされると、今度は今まで大切にしていたものでさえ惜しげもなく古いの一言でふり捨て、我れも我れもと新しい流れに追随していくのです。自

分自身で物を考える力が稀薄になっているとおうか、自分の行動に自信がないとおうか、とにかく基本がしっかりしていないから他に合わせることに多く心を向けているのが現在の世間一般の風潮のようです。他と協調しあっているのも勿論必要と思いますが、母親にしても教師にしても自分のしていることに信念がもてないなら、どうして良い子どもを育てることが出来るでしょうか。先ず自分自身が背筋をしゃんとして毅然とした態度をとることが出来ないと、人間教育は歪められてしまうと改めて思うのです。それから母と子のふれあいの大切さを、「母乳語」という言いまわしで書かれてありますが、これは言い得て妙と思います。この世に生をうけた瞬間からはじまる人間教育の出だしの一步をたくされた母親教師に、その責任の重大さを考えさせてくれることでしょうか。この本の中には、時折逆説的な表現や反養生訓に近いような見方も出て来ますが、肝要なところはびしっと釘を打ってあります。短い一行の中に何頁にもまさる大きな一言も出て来ます。本のタイトルは、「親は子に何を教えるべきか」とありますが、安直な答を求めて頁をくつても、そこには回答は出てこないでしょう。自分で何かを読みとったら、次は自分の力で

何かを考えたり、何かをしようとしなければならぬので  
す。一冊の本から簡単に答を見つつけようなどと安易な気持  
では、自分の歩む道や自分の信念は持ちえないでしょう。  
そのような意味で、母親も教師も読んで良い刺激を得ると  
思います。

## その二、兎の眼

灰谷健次郎（理論社刊）

この長編小説は、今年の一月には既に第七刷が出されて  
おりロングセラーにあげられているので、読まれた方も多  
いと思いますが、もしまだの方があつたら是非読んでごら  
んなさいと推めたい、そんな気持でとりあげました。全編  
を貫く作者の人間愛の心は読む者の胸に迫ってくるものが  
多く、時折読み続けるのがつらくなる程でした。

多くの教師は自分の置かれている範囲の中で、人との出  
会いにおいてこの本の作者と多少とも似たような経験をし  
ているといいますが、現在の私には経験の中があまりにも  
狭すぎて、体験的には共通するものにはめぐりあつていな  
いのが事実です。けれど子どもを心からいとおしいと思う  
気持の中には、自ら通じあうものがあります。新任の小谷

先生が、自分に心を開いてくれない鉄三に対して何とかし  
て心を通じあわせたいと願つてやまない姿や、要養護児の  
みな子ちゃんの世話をすることによって級の子ども中に芽  
生えていった優しいわりの思いなどというものが、ま  
るで現実の身近の出来事のように、私の中にじかに伝わっ  
てくるのでした。

こんなにも心あたたかく、優しく、そして勇氣と愛がど  
こかの小学校の中に育っている、何かを教える学校ではな  
く、人間を大切に育てる教育が行なわれている、そ  
う思ったとき自分もそれにゆかりある世界に身を置いて、  
子どもと生活することの出来る幸せを思いました。この本  
は私に、ともすれば惰性に流されがちであった日々をふり  
かえり、改めて素直な気持で子どもと接することの出来る  
泉のようなうるおいと優しさを与えてくれるのでした。

ただ、読み終わった後の感想としては「兎の眼」がこれだ  
終ったとは思えないのです。もっともずっと続きが読みた  
い、教育に終りはないと言いますが、多分作者の体験を通  
してえがかれたであろうこの小説の中で、子ども達と先生  
が、これから先どんな経験をしながらどんなに育っていく  
かをもっと知りたいと思うのです。そして読む者に、日頃

は忘れかけていたひたむきさを直に伝えてくれるあの感動を今一度求めたい、そのためにも是非「続・兎の眼」を書いてほしいと願う気持ちがおきてきて仕方ありませんでした。

### その三、旅の絵本

#### I、II

安野光雅（福音館書店刊）

この絵本には文字が一字もありません。絵本とは文字と絵から出来ていて、絵を見て字を読むものと思っている人は、この絵本はどうやって読んだらよいのでしょうか。パラパラとめくってみても、小さな絵が全部の頁に細かくえがかれているばかりです。

でも、旅をしたい人、心の旅に出かけたい方はもう一回、この小さな昔風の旅人と一緒にゆっくり頁をめくって見て下さい。まだ、車も鉄道もなかった時代です。ゆっくり歩きましょ。あ、何か知っている道を通りましたか。ずっと以前、子どもの頃にどこかで見たことのあるところでしょうか。学生時代にならった歴史の道でしょうか。それとも、一度行って見たいと夢見ていた遠い外国の街並でしょうか。

どこまでも続く美しい道を時には迷いながら、時間をかけて歩いていく、何と楽しいことでしょうか。安らぎとなつかしい思い出と、そして思いがけない発見と、文字は一字もないけれど、絵は実に多くのものを語りかけてくれます。見る人によって、読みとるものはみんな異なるでしょう。貴方もどうぞ頁をめくってみて下さい。何回も同じ道を通ってみるのも、きつとよいでしょうね。貴方はどんな旅が出来るのでしょうか。

私は家の子ども（大学生と高校生）にこの絵本を見せました。二人ともはじめは「何だこれは」といった顔で見えていましたが、やがて「アッ」と言ったり、ニヤッと笑ったり……。読後感「ああ、面白かった」そして二度も三度も自分の旅したところをふりかえって楽しんでいるので。この絵本は五歳からとなっていますので、今度は私のクラス（年長）でその反応を見たいと今思っています。はたして子どもたちはこの絵本に興味を示すでしょうか。早くその結果が知りたくて、楽しみでわくわくしています。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）